

建築物と壁畫

東京美術學校教授
帝室技藝員 黒田清輝

壁畫即ち建築物の壁面を繪畫で裝飾することが、何時頃の時代に起原して居るかといふ事は、私は學者でないから歴史的に正確な斷定は下し兼ねるが、畫家としての今日迄の見聞を綜合して、壁畫なるものが餘程古い時代に既に存在して居たといふことだけは云ひ得る。——彼の小亞細亞地方の極めて往昔の建築物にも、其壁面が繪畫を以て裝飾せられて居た跡が、歷々として分つて居るし、又紀元七十九年彼のヴェスヴィアスの噴火の爲め埋没した伊太利のポンペイ市などは、紀元前三百年頃既に隆盛を極めて居たと傳へられて居るが、其後發掘された跡を見ると、公共の建築物は元より市民の住宅に至る迄、其建築物といふ建築物は、凡て壁畫を有して居る。兎に角有史以來建築物あれば則ち壁畫ありで、此世界に於て人類が風雨を凌ぐ爲めの穴居から發達して、地上に建築なるものを營み、石或は土を以て其壁を覆ふた時代には、幼稚ながらも其時代の人類の藝術心は、其壁面を其まゝに措くことはしなかつた。即ち單純ではあるが模様のやうなものを、刻つたり彩つたりした事は、希臘や埃及の古代の建築の遺跡に見る事が出来る。是れ等は後世の壁畫と同じ性質のものであると云ひ得やう。

人類文化の進むに隨ひ、繪畫彫刻等も次第に進展して、是等の單純な壁面の模様は、遂に後世の立派な壁畫となつて現はれるやうになつたのであるが、この壁畫の發達も、氣候風土の如何によつて、各地方に非常な差異がある。北歐の如く、寒い且つ陰氣な地方では、どうしても其建築物に小さな窓を幾つも設けて、外氣の寒さを防ぐと

共に、光線を出來得るだけ充分に採り入れやうとする結果、其壁面は非常に小さく區劃され、到底壁畫を施す餘地が無い。随つて此地方の建築には、多く掛額を用ひて壁面の裝飾として居る。北歐を起原として發達したゴシック建築は即ち此適例とも云ひ得る。此の様な理由から、壁畫は南歐に最も發達して居る。就中伊太利を中心として、立派な作が遺つて居る。空氣の明るい南歐、伊太利地方の建築は、ゴシック風と異つて、小さい窓を幾つもの設けないから、随つて其壁面は大きく、壁畫畫くには最も適して居る。何と云つても、繪畫を製作する以上、小さな畫面では大きな藝術を表現する事は出來ない、これは繪畫展覽會などの作品を見ても解ることで、畫家が其の手腕を充分に揮はうとする結果、日本畫ならば勢ひ、其面積の最も大きな屏風を選ぶやうなものである。

我邦の古建築物で壁畫なるものゝ存して居るのは、法隆寺の金堂を第一とし、宇治平等院の鳳凰堂内部其他數へる程しかないが、これ等とても皆支那から傳來した建築で、我邦固有の建築には壁畫といふものは殆んど無い。それは元より我邦の建築物の構造上、然うある可きことで、我邦の建築は、南洋地方に現今でも見られる、木を組むだ土人の家のその發達したものと見られるもので、我邦の氣候風土の關係上、壁面が非常に少ない。随つて壁畫といふものゝ施こされる場所がなかつた。であるから我邦に存して居る建築物で壁畫を有して居るのは或る時代の特種の建築に限つて居る。その代り、北歐地方に於ける掛額と同じ性質とも見られる掛物、即ち畫幅が裝飾に用ひられて居る。足利時代以後、襖が用ひられるやうになつてからは、これに畫を畫いて、室内を裝飾するやうになつた、この我邦の繪襖は歐洲地方に於ける壁畫と殆んど同じ意味に用ひられて居るもので、室内裝飾として壁面が白いまゝでは措かれないのと同じく、襖も白地のまゝでは物足りない感じがある、丁度寒暑を凌ぐ爲め

の衣服も、人文の發達すると共に生地のみでは、満足出來ないと同じ理であらう。此我邦建築に於ける壁畫たる繪襖が、便利に發達して出來たのが屏風で、輕便な壁畫の一種とも云ひ得やう。又後世の建築物には、壁其物に直接に畫かない迄も、室内の裝飾として床の間其他の壁面に、繪畫の用ひられて居る例は澤山ある。

印度にも支那にも、其他人文の發達した地方の建築には、壁面が繪畫で裝飾せられた例は澤山ある。

ところが近代我邦に洋風建築の移入されて、住宅に公共建築物に、随分用ひられて居るに拘はらず、室内の裝飾として壁畫を施こされた例は殆んど少ない。一般の人々は壁畫といふと贅澤物視し、又は遠い昔の風習のやうにのみ思ふて居やうが、決してそんな範圍の狭いものではなく、建築物ある以上、それに相當な裝飾の必らず施こさる可き事は、昔も今も變ることではない、現に日本建築に於ける襖を見ても解ること、それは、只洋風建築の形骸だけを眞似て、満足して居るもので、丁度シャツもカラーもネクタイもなしに洋服を着て居るのと同じ譯であらう。又假に洋服にしても、下着は下着、上着は上着と、それ相當の地質も柄も必要である。建築も其の通りで、建築相應の裝飾が必要なのである。壁畫は決して贅澤ではない、必要品である。

彼の伊太利羅馬のシャンピエールの寺院に附屬して居るシキスチーンシキスチンの禮拜堂シキスチンの内部は、ミケランゼロの壁畫で有名であるが、この壁畫にしても、正面は、「最後の裁判」即ち云はゞ地獄極樂の繪があり、天井及其他の壁面には一面に宗教畫が畫かれてあるが、此の堂内が唯一面の白壁であつたら何うであらうか、精巧な宗教畫の壁畫で充たされて居る此堂内へ入つたほどの崇高とか、壯嚴とか、神に對する畏敬とかの觀念を起す事は無からう。斯う觀て來れば、壁畫も亦立派に建築物の必要裝飾品であらう。我邦に於ける近い例を取つても、青山の東宮御所の天

井畫、丸の内帝國劇場の天井、及食堂の小壁、近く竣成する中央大停車場の貴賓室の壁畫等、其場所に應じて壁畫が施こされて居るのは、其建築が白壁で描かれては、和かな感じを與へないからで、これによつて、建築の威嚴も添へば、快感も起る。實に建築物に壁畫又は天井畫はなくてはならないものである。唯建築の性質によつて、輕重の問題あるのみで、バラック建築ならバラック建築として、裝飾の程度があり、住宅は住宅、政廳は政廳、其の建築の用ひらるゝ意味を強く表はす爲めと、其建築を無趣味ならしめざる、即ち建築の利用といふことは壁畫の因て起つた所以なのである。自分は、今後の建築に此の壁畫なるものゝ、盛んに用ひられん事を望むで居る。

又古い建築の壁畫は、其時代の巨匠が各其腕を競うたものであるから、後昆に残るべき大なる價值を有して居る如く、今後の大建築にも大に壁畫の用ひられて、畫家が競技の場所ともなり、隨つて偉大なる作品の出る事をも望んで居る。(大正三年十一月談)

『建築工芸叢誌』二一〇大正三年二月